

演題名：ジルコニアをインプラント補綴にどう使用するのか？

Considerations when using Zirconia for Implant Prostheses

抄録:

インプラント治療が欧米で商業化され35年以上経ち、学術論文でもインプラント体の高い生存率が示されており、その信頼性も増してきたように思われる。しかし、それに対し従来のインプラント補綴物（陶材焼き付け、レジン前装、アクリリックレジン等を使用した補綴物）の成功率は十分に高いとは言えず、これからの改善が望まれる。

近年、CAD/CAM テクノロジーの発展に伴い、材料の選択肢としてジルコニアを用いた補綴物が注目されている。ジルコニアは、その破折強度、生体親和性、審美性などの点から幅広く使われるようになってきた。前述した成功率の改善のため、また、併発症を回避するためにジルコニアのインプラント補綴への応用は有効と考えている。

しかしながら、ジルコニアを使用する事で併発症が自然に減ると考える事は非常に危険である。例えば、ジルコニアの使用で改善が望める併発症に前装部の破折が挙げられるが、ジルコニアのフレームデザインには配慮が必要であり、それなしに併発症の改善は難しいと考えられる。また、ジルコニアを選択した場合に不適合が確認されると、金属のように切断して鑑着するといった対応ができない。こういったジルコニアの特性も理解し使用する必要がある。

さらに、ジルコニアに限る話ではないが上部構造物の適合は良いに越した事はなく、そのために Intraoral Luting（口腔内合着）をお勧めしたい。この方法は、補綴物とアバットメントのコーピングを口腔内で合着することにより、より補綴物の適合をパッシブフィットに近い状態にすることが可能である。これにより、スクリューの緩みなどの併発症を最小限にできることを期待している。デジタル化に伴い将来的には、口腔内スキャナー（iOS）などの進歩につれて、こういったものの必要も薄れていくと予想されるが、現時点では必要だと考えている。

ジルコニアは、論文的な検証、長期的な予後など不明の部分も多いことから、使用には十分な配慮が必要である。今回は、インプラント補綴にジルコニアを応用する際のポイントを提示し考察したい。

土屋 嘉都彦

米国歯科補綴ボード認定専門医

福岡歯科大学臨床教授

Kazuhiko Tsuchiya, DDS, MSD.

Diplomate, American Board of Prosthodontics

Clinical Professor of Fukuoka Dental College